



国連持続可能な開発目標(SDGs)達成のための科学技術イノベーションと その手段としてのSTIロードマップに関する提言

～ 世界と共に考え、歩み、創るために～

1 提言の狙いと背景: SDGs達成のためのSTIの位置づけ

- 「持続可能な開発目標(SDGs)」は、「誰一人取り残さない」をスローガンに2030年までに持続可能な社会を目指す社会のマスタープラン。科学技術イノベーション(STI)は、SDGsの達成上、有限のリソースを最適化し拡大を図る「切り札」。
- 政府、科学者、産業界、市民社会、資金調達機関、NGO等のマルチ・ステークホルダーが、この取組をいかに体系的に推進すべきか、との点に関し、「SDGs達成のためのSTI活用に関する工程表(ロードマップ)」策定の必要性が国際社会で指摘されている。

2 STIを巡る国際的なトレンドとSDGs

- STIがSDGsの幅広い社会課題を解決する視点と、SDGsがSTIそのものの発展の方向づけを行うという視点が重要。
- マルチ・ステークホルダーの官民パートナーシップ(PPP)での取組は大学と企業の連携、新たな投資・ビジネスの創出、科学技術のフロンティア開拓につながる。
- 各ステークホルダーが連携し「面」で課題に取り組むことは、置かれた立場や目標・方向性の明確化につながる。
- これには国民の幅広い理解が必要。
- 現場のニーズ把握、現状とのギャップの分析、ニーズを踏まえた研究開発、実用化・事業化、社会実装を通じた社会変革という円環的な流れが重要。これに有効な手段がロードマップであり、プラットフォーム。

3 STIロードマップ策定の3つの留意点

- 政策の整理、科学技術の動向把握、ボトルネックの特定とその克服に必要な研究開発・制度設計・投資等の分析という「知の構造化」が重要。
これを通じ、必要な行動を俯瞰し、取組状況をモニターする流れが必要。
⇒ ロードマップは、いつまでに何をすべきかを可視化できる「共通のコミュニケーション・ツール」。
- STIロードマップ策定には以下に留意。
 - ①「知の構造化」により、各ゴールをネットワーク化し、シナジー効果の最大化やトレードオフの最小化につなげる。
 - ②3つの階層(政策レベル、ゴール・セクターレベル、各プロジェクト・レベル)で構成。
 - ③オンライン・プラットフォームで共有。

4 STIロードマップの「共通の要素」の抽出に向けて

- 開発段階・社会・経済・政治状況、設定目標等により、STIロードマップの様相は異なる。しかし、欠かすことのできない共通の要素があるはず。
- STIロードマップの策定プロセスの共有(commonization)は有益。ロードマップは各国の社会・経済・文化的事情に即したもの(customization)であるべき。
- STIロードマップの国際展開には、課題と解決策(技術シーズ)のマッチングをうまく機能させる必要あり。

5 次のステップ、そして日本が果たしうる役割

- 大阪G20, TICAD7, 2019SDGs首脳会合などを念頭にSTIロードマップ策定に向けた取組を促進すべき。
- 日本は他国に先駆けロードマップ策定を始動。国際社会への貢献のため、皆と共通の目線に立ち、共に創っていく姿勢が重要。